
月刊FALCOM MAGAZINE
Vol.04
啄木鳥しんき
イラストメッセージ
ランディのお気楽な仮面に
隠された過去とは!?
零の軌跡
四つの運命
梅雨でユウウツな気分を吹き飛ばせ!
みんな集まれ!
ファルコム学園
『碧』とアニメの最新情報がてんこ盛り!
ファルコムニュース
深い悲しみを背負った
レーヴェの決断とは!?
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
巻頭特集
ソネットエンタテインメント プロデューサー
富永竜也インタビュー!



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 空の軌跡 ONLINE MOBILE

ソネットエンタテインメント株式会社　プロデューサー

富永竜也氏

『空の軌跡』が携帯MMO-RPGゲームに!?
３月がサービス開始されているこのゲームには、
並々ならぬ「ファルコム愛」が込められていた！



――まずは『空の軌跡』をモバイルMMOにしようと思われた経緯をお聞かせください。

富永竜也氏（以降、敬称略）：ソネットグループは以前からオンラインゲームに力を入れており、PCでも数多くオンラインゲームをやらせていただいています。そこで、携帯でもPCと同じくオンラインゲームが遊べるようにできないかなーという考えから最初は始まったんです。

それにどうせ作るなら、私も子供の頃からファルコムさんのゲームが大好きだったというのもありますし、もちろん『空の軌跡』も遊んですごく楽しかったので、自分の好きなタイトルのライセンスをいただいてMMO化できれば、とダメもとでファルコムさんにお願いに伺ったという感じです。

――ではご自身で『空の軌跡』をチョイスされ、ファルコムさんに話を持っていかれたということですが、最初にお会いした際はどのようなお話をされたのでしょうか。

富永：先ほどお話ししましたように、携帯でもPC同様のオンラインゲームが遊べないかという考えから始まったんですが、PCのゲームとは異なるプレイスタイルが受け入れられるのかというチャレンジングな試みだとも思っていました。ただ、そこが新しいファルコムのユーザー獲得にも繋がるんじゃないかというところで、是非やらせてくださいとお願いさせていただきました。『空の軌跡』というとファルコムさんが特に力を入れておられるタイトルです。その世界観がいかにMMOに向いているかとか、システムのこういうところをこうしたらMMOとして面白くなるんじゃないんか、というところを熱くファルコムさんに語らせていただきました。ファルコムさんも是非チャレンジしてみたいということで、私たちがやらせていただけることになりました。

“名も無き遊撃士”、歴史の表舞台には出てこないけれどもそういう遊撃士の一人になって遊んでもらえたら楽しめるんじゃないかと思いまして。

――「空の軌跡オンラインMobile」はプレイヤーがエステルやヨシュアのような作中のキャラクターではなく、オリジナルのキャラクターとなり『空の軌跡』の世界観を楽しむゲームになっております。改めてこのゲームについてお聞かせください。

富永：『空の軌跡』の世界はエステルやヨシュアの他にもいろんな遊撃士がいるんじゃないかと――まあ実際いるはずなんですけども――いろんな遊撃士がエステルたちとは別のところで事件を解決してるんじゃなかろうかと。それならプレイヤーの皆様には、その“名も無き遊撃士”、歴史の表舞台には出てこないけれどもそういう遊撃士の一人になって遊んでもらえたら楽しめるんじゃないかと思いまして。実際にFCのキャラクター達も出てきてますので、原作ファンの方には彼らと同時代を生きるような楽しみ方をしていただければなと思っております。もちろん、原作を知っていればゲームの中で思わずニヤリとできるような仕掛けもほどこしていますので、是非そういうところも見つけていただければと思っていますね。

――プレイヤーが自分で自由度を高めていくのがMMO-RPGであったりすると思うんですけれど、一連の基本的な遊び方というのを教えていただけますでしょうか。

富永：まずゲームが始まるとシェラザードからのチュートリアルが始まります。見習い遊撃士としての試験をクリアすると、プレイできるエリアが広がったり、オーブメントも使えるようになったり、またクオーツが作れるようになったりします。受けられるクエスト

も増えていきますので。段階的にゲームを進めていけるようにしています。

その中で自由度には気を使っています。MMOではどこへ行くとか、どんな目的でプレイをしていくのか、他のユーザーの方々と協力しあうのか、それともしあわないのかも自由です。

ただ、最初からあまりにも自由すぎると、特にMMOに不慣れなユーザーの方にはハードルになってしまうので、そういう方がプレイする楽しみを見失わないような作りを心がけています。

ゲームの中では原作に出てくる衣装も楽しめるようになっています。実際に原作でヨシュアが女装するようなシーンがありますが、男性キャラでもメイド服を着れるようにしているので、そういう衣装をアバターに着せたりして楽しんでいただけると、さらに盛り上がっていただけると思います。

――MMOということで、町には他のプレイヤーさんもいます。その中で、遊撃士としての仕事や依頼をこなしたり、他のプレイヤーさんとコミュニケーションを取ったり、アバターで自分の好きな衣装を変えて楽しんだりすることができるということですね。現在は3月の正式サービスが始まってから約3ヶ月弱が経っていますが、プレイヤーさんの状況などはいかがでしょうか。

富永：サービスを開始後、お客様からご要望などをいただいて、そのご意見を参考に日々バランスの調整や序盤のプレイフローをこまめに見直したりしました。最初に始めた時は私たちが想定していた通りにはお客様を誘導できなかった部分もありました。そんな中で結構ご不便もおかけしたというところもあるんですけれど、今日まで3ヶ月弱サービスを続けてきて、お客様のご意見を吸収しながらバランスを調整し、今は初期と比べてもだいぶ遊びやすくなっているかと思います。当初ご指摘をいただいていた「遊びにくい」という点もだいぶ消化できてきたかなという感じです。現在は毎月イベントを行ったり、毎週のように何かしらのアップデートを入れています。

サービス開始当初は厳しいご意見などもありましたが、こういう運営側の努力も認めてもらえてきているのかはわかりませんが…最近ではユーザーの皆さんからの応援の声もだいぶいただけるようになってきました。

――エステルやヨシュアたち『空の軌跡』のキャラクターと同じ世界に行くという点について、プレイヤーさんからの良いリアクションは返ってきていますか。

富永：そうですね。ユーザーさんの中には原作ファンの方も相当数のいらっしゃるので、特に原作のキャラクターが出てくるイベントなどでは喜んでもらえているようです。

また、原作を知らない方からも、

ファルコムさんの新作タイトルとのコラボレーションイベントなど、そういうものもやっていければと思っています。

元々原作のキャラクターの魅力や世界観の完成度が高いというのもあり、反応は上々です。

――随時追加されていく新しい町のアップデートなどはブログで発表なさっているんですよね。これはこの後もどんどん追加されていくと。では、今後どんな形でこのゲームを展開していこうと思われていますか。

富永：まだ胸を張ってお約束できる段階ではないんですけれども、ただ新しい地方が追加されるだけのようなアップデートではなく、ゲーム内でチャレンジできる楽しみが見出せるような遊びを入れていくような大幅なアップデートを夏頃に検討しております。

また先日、ファルコムさんがシリーズの最新作「碧の軌跡」を出されるという発表がありましたが、ファルコムさんの新作タイトルとのコラボレーションイベントなど、そういうものもやっていければと思っています。

――本筋から少し外れますが、ご自身がファルコムさんのゲームの中で好きなタイトルはなんでしょう。

富永：私は「ソーサリアン」ですかね。子供の頃、ソーサリアンはかなりハマりました。「ザナドゥ」や「ロマンシア」とかも好きでした。

子供の頃、ファミコンを欲しがった私に親はファミコンではなく、MSXを買って来まして…さらにどういうわけか、父親が買って来るゲームがファルコムタイトルばかりで、気づいたら私も生粋のファルコムっ子になっていました（笑）。

ファルコムさんの作品は、細かい描写だとかストーリー、世界観やキャラの魅力とかそういう作り込みの半端なさが魅力かなと私は思っているので、その作り込みに恥じないものを作る心がけで私たちもがんばっています。

――ファルコムさんのゲームの魅力はその作り込まれた世界観もあるんですけれど、もうひとつ専属の「ファルコム・サウンドチーム jdk」が作る音楽も人気が高いものですよね。その点について、オンラインのほうでのBGMはそのように作られているのでしょうか。

富永：原作の音楽をそのまま使っているんですよ、できるだけ原曲に近い形で楽しめるように。むし









ろオリジナルの曲を一切入れず、フィールドの曲だとか町の曲だとか、容量の許す限り原作に忠実にやっています。

――プレイヤーではないNPCとして様々なキャラクターがいると思うんですけども、ご自身の中でお気に入りのキャラクターはいらっしゃいますか？

富永：私はシェラザードが好きですね。『空の軌跡』のキャラクターの中でもシェラザードは特にセクシーなので（笑）。それに酒好きなのもたまらないですね。私もお酒好きなんで。シェラザードみたいな女の子とお酒飲みたいです（笑）

――ありがとうございました。それでは最後に、読者の皆様にひと言お願いいたします。

富永：原作がコンシューマーのゲームなので、PCも携帯も含めてオンラインゲームをプレイしたことがない方もいっぱいいらっしゃるかなと思うんですけども、特にオンラインゲームをプレイしたことがない方にプレイしていただきたいなあ、と。登録後7日間は無料で遊べますので。原作とは違うオンラインゲームならではの楽しみっていうのを私たちもがんばって色々工夫して入れていますので、空の軌跡が好きでオンラインゲームをプレイしたことがない方にも是非遊んでほしいなと思っています。

遊び方

iMenu → メニューリスト → ゲーム → ロールプレイング → 空の軌跡オンラインM

※本ゲームはNTTドコモが提供する、iモード専用のアプリです。

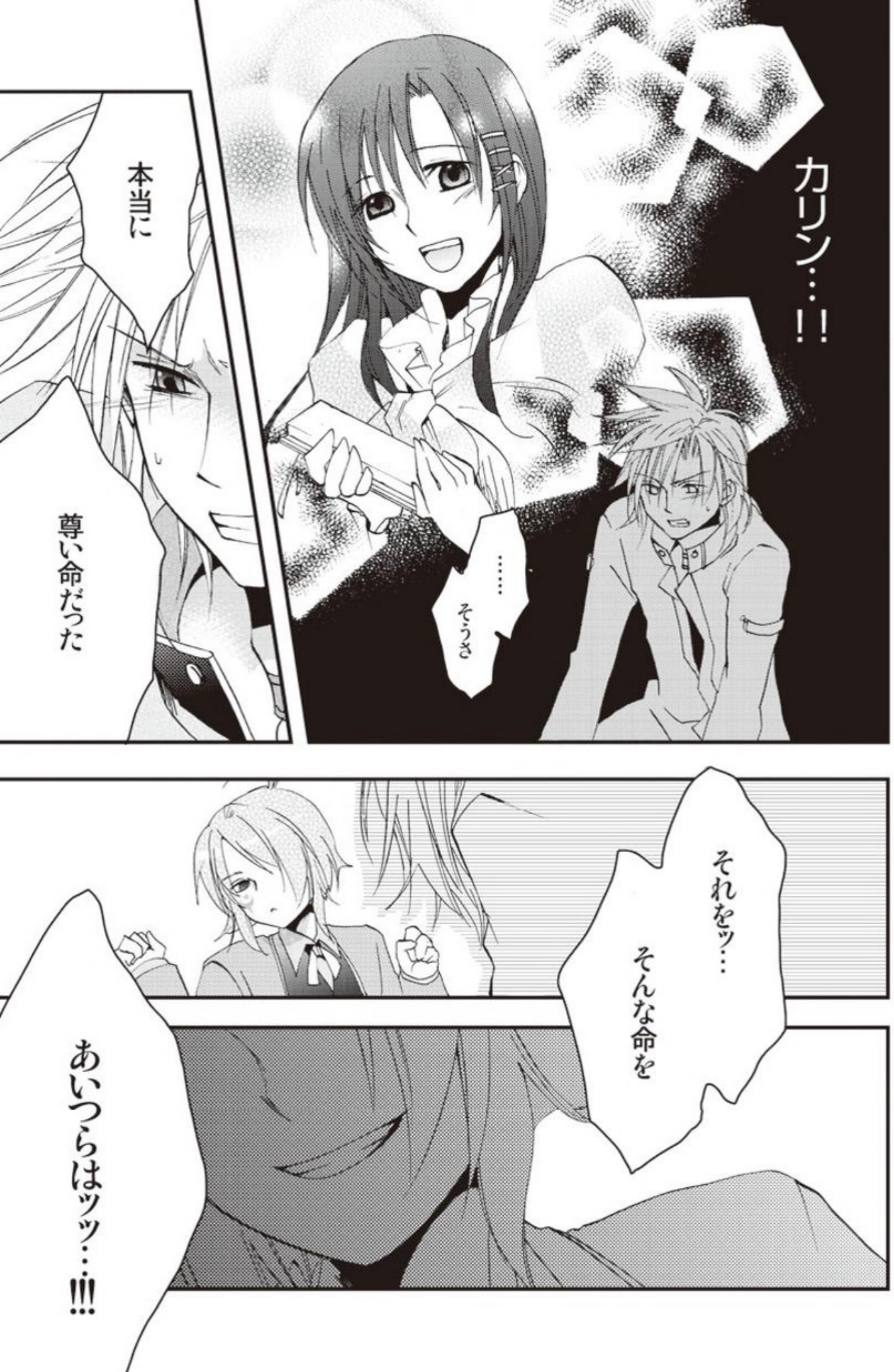
富永竜也

1976年生まれ。ゲームメーカーでプランナー、ディレクターを経て、ソネットエンタテインメント株式会社へ入社。いくつかのオンラインゲームサービスのプロデュースに従事し、現在に至る。



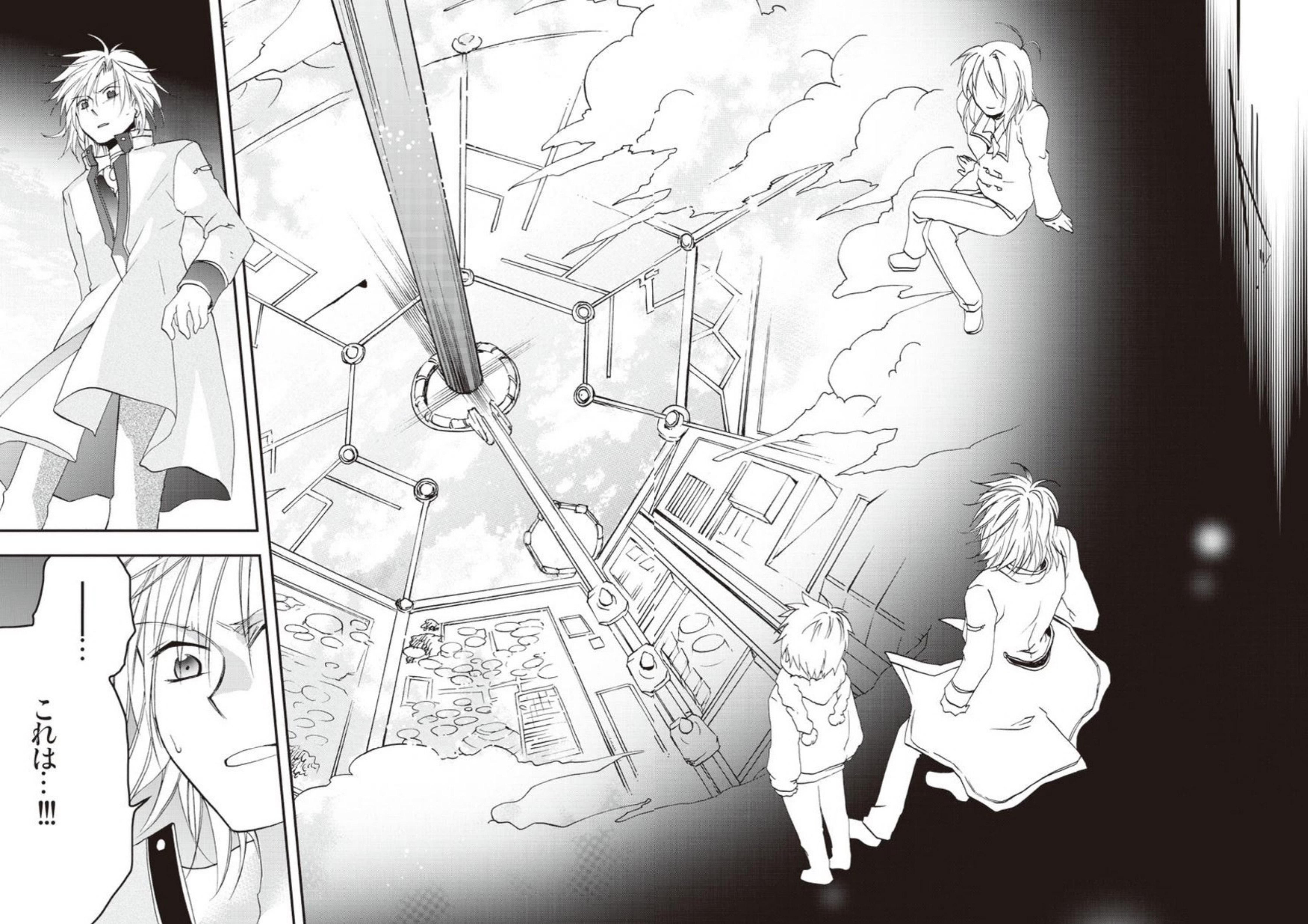

そんなに警戒しなくても大丈夫
——っていっても仕方ないか
最近この辺は物騒だからね
!!
また強盗?
それとも帝国の狗かな?
残念だなぁ…
以前はおだやかな土地だったのにさ


……
理不尽だよね…
こんな素敵な
村が
国の勝手な都合で
存在ごと
消されるなんて
なぜ それをっ…!!
ホント
もったいない
ことするよね
この村で育った
人間はさぞかし
美しい心を
持っていただろう
なあ…


カリン…!!
……
そうさ
本当に
尊い命だった
それをッ…
そんな命を
あいつらはッッ…!!!


――その原因は
人間の"弱さ"さ
!?
いつのまにッ…
人は弱いから 大きく強いものに 屈することを選び
楽で気持ちいい 方へと流れていく
スタ…
スタ…
それは「保身」とか
「自己欺瞞」と いえるかも しれないね

件の戦争だって 意味のないこと なんかじゃない
そうすることで 誰かは得をし 立場を守っただろうね
多くの人は そういうものさ
脆くて 弱い
…何者なんだ こいつは…
…その
"弱さ"が 人を殺すと いうのか?
そうさ
あぁ そうだ! 君にいいものを 見せてあげよう



――…
これは…!!!


これは
リベル＝アーク
至宝のひとつ
輝く環（オーリオール）の力によって
築かれた
巨大な
浮遊都市さ
オーリ…
オール？
至宝は確か
日曜学校で
教わったな
だがあれは
ただの…
くすくす


――至宝は
おとぎ話じゃ
なかったのさ
このリベル＝アークは
輝く環（オーリオール）の起こす
“奇跡”の力で
飢えも労働も
心配いらない
天上の楽園として
実在していた
だから僕らは
この輝く環（オーリオール）を
探してるんだ
これさえあれば
全ての国家は
意味をなくす
帝国も
リベールも
あらゆる国家を
解体してやることが
できるのさ
……


——輝く環のおかげで天上の楽園になっていたのなら
なぜこんな巨大な都市が滅びたんだ？
俺たちが知っているおとぎ話では至宝の加護によって…
君なら彼らの表情を見ればわかるでしょ
……
…表情…
…まるで
生気が…ない…!?

“堕落”だね
これはかつての巨大都市リベル＝アークが滅びる直前なのさ
これからこの国は滅びに向かっていく
無限に起こる奇跡に頼り
戦う強さを忘れたせいでね——…

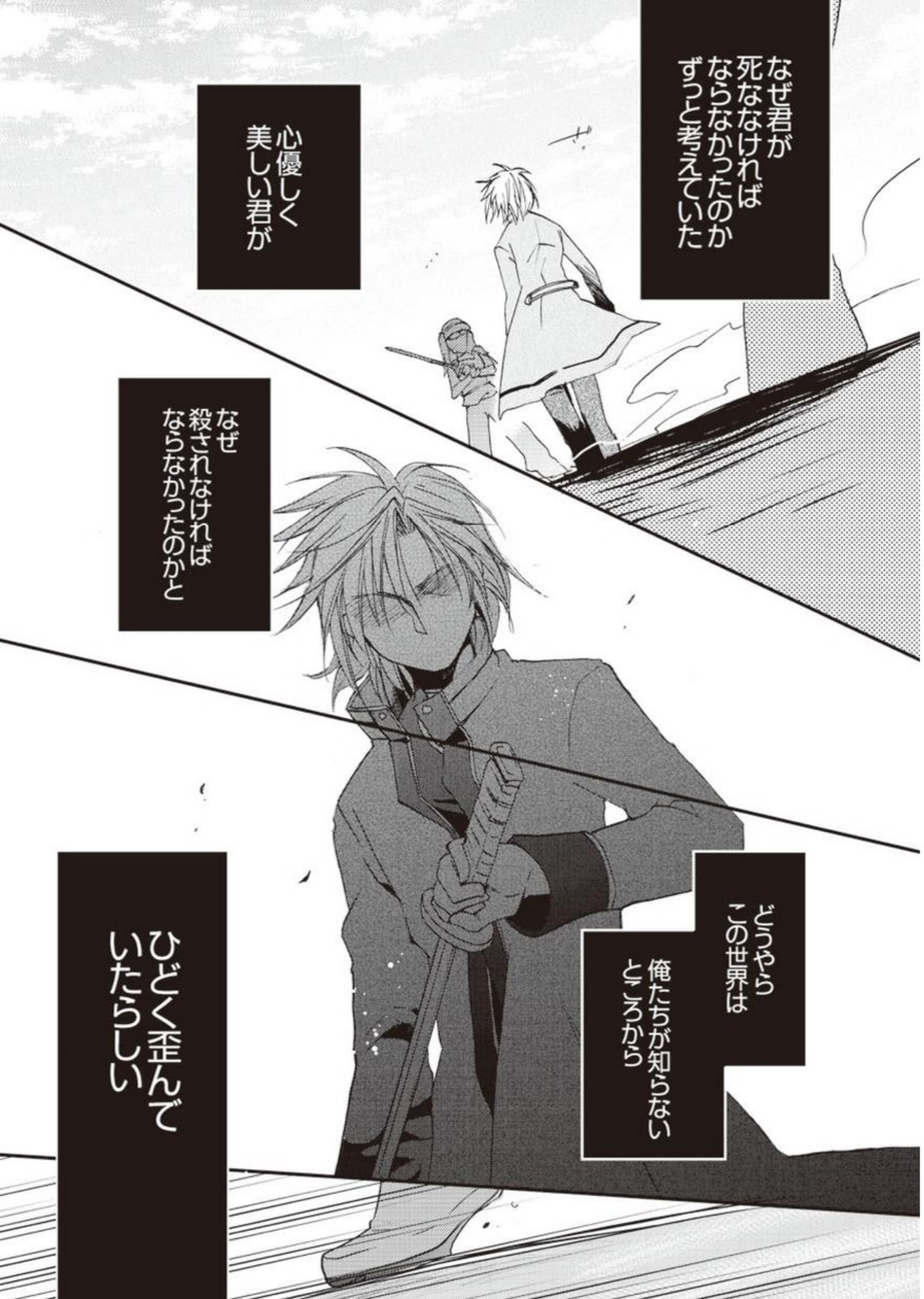

──これが
弱さが
人間を殺すといいうことか──…!!!?
ギリッ…
君の愛する人は強かったんだね


彼女が弱い人間ならあの時
泣いて足にすがりついて命乞いしただろうね
あるいは弟を捨てて走り去ることだって彼女にはできた
弟をかばうどころか弟を盾にすることだってできた
だけど
彼女は強かったから
それをせずに
そして死んだ


君の愛する人はこの都市のように
人間の弱さに殺されたんだ
パチンッ


スゥッ…
あの
輝く環(オーリオール)を
僕らと一緒に
探さないかい？
女神が与えた
軌跡の力で
みんなの目を
覚まして
やるんだよ
己の脆弱さから
目をそらし続ける
人間共に さ


…もう
話の途中
なんだけどな
まったく


……ヨシュアを
頼む
──お安い御用さ
……カリン

なぜ君が死ななければならなかったのかずっと考えていた
心優しく美しい君が
なぜ殺されなければならなかったのかと
どうやらこの世界は
俺たちが知らないところから
ひどく歪んでいたらしい


歪みは正すべきだ
絶対に
だから
俺は
うふふ
歓迎するよ
レオンハルト
ようこそ
身喰らう蛇（ウロボロス）へ!!!
そのためになら
俺は


俺は
人間（ヒト）として生きる道を
棄てる……!!!!


——この世界に
またひとり


修羅が生まれたのですね……
つづく


啄木鳥しんき
ファルコム大好き!
『ドラゴンスレイヤーⅣ』 私はファミコン版しか遊んだことがなくて、そのFC版はナムコさんから発売されているのですが…ここで紹介しても問題ないそうです。よかったよかった。
通称ドラスレファミリー。能力の違う4人の家族と1匹のペットをとっかえひっかえ操作しながら、最終的にダンジョン内のドラゴンを倒しにいくアクションとパズルなゲームです。
パッケージイラストで、聖剣ドラゴンスレイヤーを携え一番大きくかっこよく描かれているお兄ちゃんが、ゲーム内では、一番出番が少なく「ラスボスを倒す」以外することがないのが…ある意味斬新です。



みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

暗殺者がやってきた



アドルさんの証言



銀



アドルさんの流儀



横槍



金の太陽　銀の月



拒絶反応



小説版

零の軌跡 四つの運命

ランディの章

田沢 大典
Illustration 松竜

特務支援課の入っているビルの一階。ロイドとエリィは、ティオを連れて台所へ向かっていた。夜中だというのに、データの打ち込み作業を続けようとするティオを、少し強引に誘って休憩させようとしていたのだ。

三人で夜の薄暗い部屋を歩くと、台所に灯りがついているのが見えた。

特務支援課の寮には、ロイドたち四人と課長であるセルゲイしか入寮していない。うち三人がここにいて、セルゲイは打ち合わせのために警察本部に出向いている。ということは、台所にいるひとりは消去法で容易に想像がついた。

ロイドたちは台所の中に入った。台所は複数人が使うことを想定していて、それなりの広さがある。やや古びてはいるが、シンクやコンロなどは清掃がいきとどいていた。そして部屋の中央付近には、テーブルがそなえつけられていて、ここで盛りつけなどを行う。支援課の男性陣は、飲み物を飲んだり軽食などを手早く食べる時に、ここで済ませてしまうこともあった。

そのテーブルにもたれかかっていたひとりの男が、陽気に手を上げてロイドたちを出迎える。

「よぉ、こんな時間におそろいとはな。どうした?」

「どうした、はこっちのセリフだよ、ランディ」

ランディはテーブルに置いてあったグラスを手に取り、ひと口飲んだ。中身は琥珀色の液体。おそらくは、酒の類なのだろう。ランディの顔も、心なしか赤みを帯びていた。

「部屋で飲もうと思ったんだが、つまみになるものを探しててな」

そう言いながら、ランディはロイドの顔を見ていて妙案を思いついたようだった。

「なぁロイド、ちょうどいいからなんか作ってくれよ」

「なんかって……おつまみを?」

ランディに無茶ぶりをされて、困るロイド。

「そうそう! 前に作ってくれた貝のバターソテーがうまくってなぁ。お前さん、料理の才能あるぜ」

ロイドにからむランディを見て、エリィとティオはふたり同時にため息をついた。

とはいえ、ロイドの料理の腕はちょっとしたものであることは、支援課の全員が認めていた。現にティオが休憩を取ろうと思ったのも、ロイドのある提案に釣られた結果である。

「ランディさん、残念ながらわたしの方が先です」

ティオは、ランディの言葉に反応した。

「先って、なんだよ?」

「ココアです。それを作ってもらうということで、休憩を取ることにしました」

「はぁぁ~? ココアなんて、牛乳あっためて粉を溶くだけだろ? そんなもん、ティオすけひとりで作れるじゃねーか」

「違います。ランディさんはココアの奥深さを1リジュも理解していませんね」

そうなのか? と言いながら、ロイドの方を見る。ロイドは苦笑し、ホーローの手鍋をキッチンの戸棚から出しながら答えた。

「ココアパウダーと砂糖を少量の水で練るんだ。そうしないと、おいしいココアにならない。あと、隠し味で塩を少し加えることかな」

「えっ、お塩?」

今度はエリィが不思議そうな顔で尋ねた。

「あぁ、少量の塩を入れた方が、甘みが増すんだ。不思議だろ」

「ロイドさんのココアはそれだけではありません。最後に、ホイップしたクリームをたっぷり乗せるんです」

そう言いながら、ティオは両手をあわせて目を閉じる。以前に飲んだ味を反芻しているようだ。

「コクが出て美味しくなるんだ。ただ、そうすると重すぎるから、牛乳の量を減らして、少し水を足すんだけどね」

そう言いながらロイドは、手早くココアパウダーや牛乳などの用意を始めた。

「なるほどねぇ。でもよ、それだけ手間暇かけるんなら、ついでにおつまみのひとつぐらい作ってくれても……」

なおもロイドにすがろうとするランディの目の前に、エリィがビーフジャーキーの袋を差し、にっこり微笑んだ。

「はい、どうぞ」

「へいへい、どうもありがとうございますっと」

少しふてくされながら、ビーフジャーキーを口に放り込むランディ。わざとらしく噛んでいるのは、おつまみを作ってもらえなかったことに対する当てつけだろうか。

そんなランディの様子を見て、ティオはいつものジト目で睨む。

「それにしても分かりません。何故自分の思考を鈍らせるような物をわざわざ飲むのですか？」

最初、何を言われているか分からなかったランディは、ティオの視線の先にあるのが、自分が手に持っているグラスだと気づいた。

「酒のことか？　そりゃぁ、酒さえあればこの世は天国だからさ」

「単純すぎです」

ティオの言葉に、思わず苦笑するランディ。

「単純じゃなけりゃやってらんないのよ、人生ってやつは」

そう言ってグラスの中の琥珀色の液体を見つめ、グッとあおった。

目の前に広がるのは、赤茶けた世界。

土ぼこりが立ちこめる。これは、崖崩れと小屋の爆破で起きたものだ。土と硝煙が混じった焦げ臭い独特の匂いが、ぁたりにたちこめる。

そんな中、人々がそこかしこに倒れていて、その身体にはまだら模様が描かれていた。血だ。血があちこちに飛び散り、まだら模様となっているのだ。

倒れているのは、ボディアーマーを着こみ、銃器で武装した猟兵たちだ。その側には、数多の銃器が落ちている。応戦しようとし、むなしく倒れたのだ。身体に穿たれた無数の穴が、激しい撃ち合いを物語っていた。

そのはずだった。

だが、そんな光景は、ありふれたものだ。ただの猟兵団（イェーガー）のぶつかり合い。ただの殺し合い（ビジネス）。

倒れている人々の中にひとりだけ、あきらかに猟兵ではない服装の青年がいた。戦いの匂いをみじんも感じない普段着。その青年を抱きかかえる。

沈黙が耳鳴りとなって、痛い。

青年は息も絶え絶えといった様子で、その息づかいは荒いはずなのに、まったく聞こえない。

何故、と思ったその時、青年が手を伸ばした。何かを掴むように、こちらに手を伸ばす。

身体が勝手に動き、その手を握りしめる。顔を見ようとするが、何故かそこだけ、ぼんやりと霞がかかったように分からない。青年は必死に手を握りしめ、最後にひと言。

「ラン……ディ……」

ほとんど聞こえないほどのかすれ声でしゃべり、そして沈黙した。そのまま、糸が切れた操り人形のように、伸ばした手が地面に落ちた。本来するはずの、どさりという音は聞こえなかった。

だらしなく垂れ下がった頭。そこではじめて、青年の顔が見える。そばかすと、大きく見開かれた瞳。その瞳から光が消え、ガラス玉のようにあたりを映す。そこに映っていたのは、なにが起きたのか分からないという顔をし、頬を土と血にまみれたさせた、この世界のように赤茶けた髪の――

バッと身を起こす。

ハッ、ハッと荒い息づかいが耳障りだ。

誰だと思ったら自分らしい。

すぐに大きく息を吸い、吐く。

吸い、吐く。

それを五回ほど繰り返す。

深呼吸をしながら、あたりの様子をうかがう。

どうやらベッドの上らしい。部屋は暗く、ほとんど何も見えない。

息を整えてから、自分に語りかける。

俺は誰だ？　ランディ・オルランドだ。

ここはどこだ？　ベルガード門にある、クロスベル警備隊の施設だ。

今は何時だ？　外の明るさからして、おそらく明け方前。そろそろ日が昇る頃だ。

はぁ、とひとつため息をついてから、ランディは苦笑した。

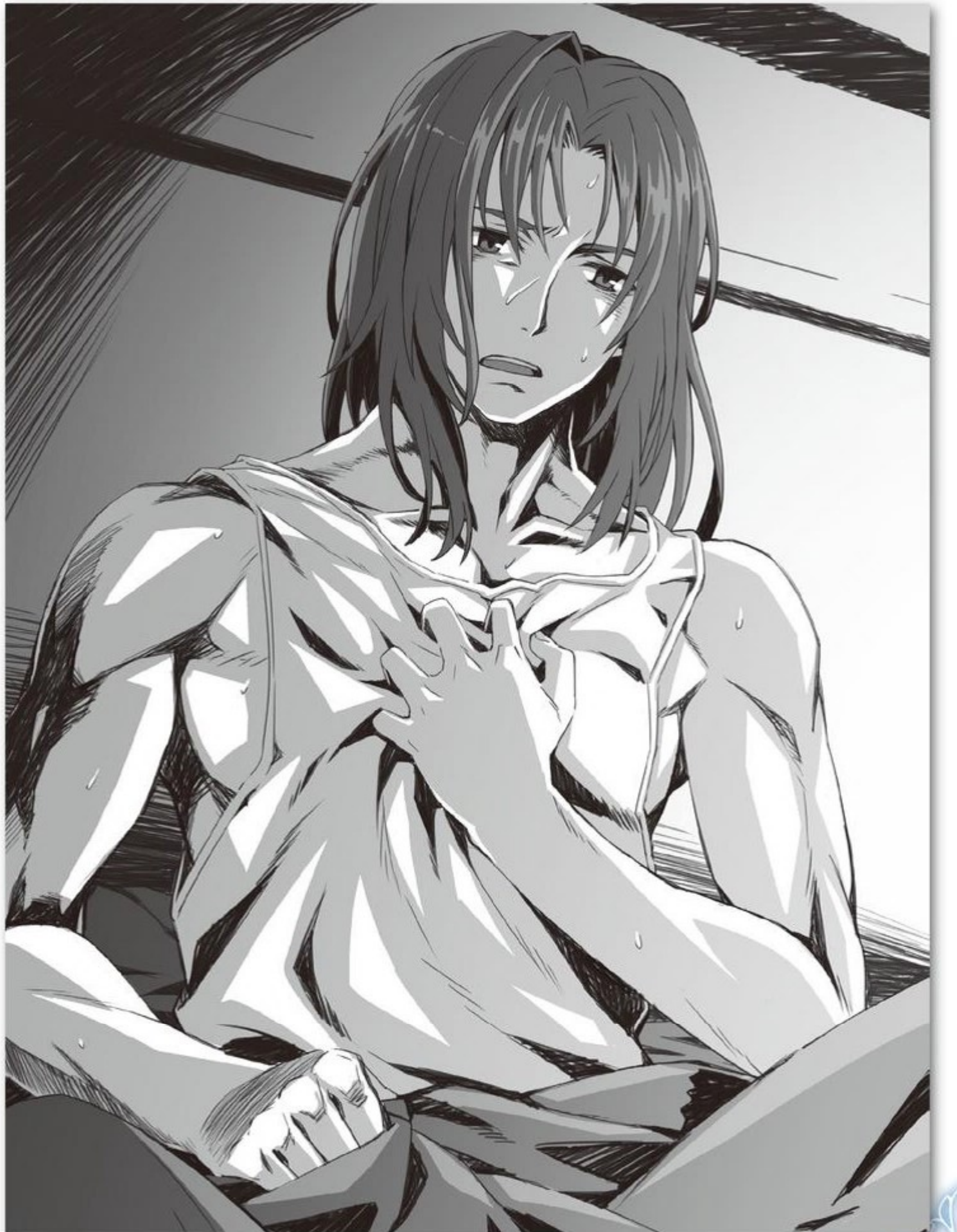
「習い性ってのは、やなもんだぜ……」

飛び起きたランディが行ったのは、パニック時に行う状況把握のイロハだ。かつていた組織で、幼い頃からたたき込まれているので、こういう時にとっさに出てくる。

その組織は《赤い星座》という。ゼムリア大陸西部最強と言われる猟兵団のひとつだ。

猟兵団とは、ミラで雇われる傭兵団の中でも、荒事を得意とする集団を指す。戦争屋、などと揶揄するものもいる。《赤い星座》は、そんな猟兵団の中でも《西風の旅団》と並び恐れられる一大猟兵団だ。ランディはかつて、そういう組織に属していた。

寝間着代わりのTシャツが、汗でべとついている。とっとと着替えないと、と思ったその時、コンコンとノックの音がした。そしてドアごしに、若い女性のくぐもった声が聞こえ



る。

「ランディ、大丈夫？」

　その声に、おう、と答えてベッドから起きてドアを開ける。扉を開けると、廊下の灯りが目に飛び込んで来て、思わず目を細めた。

「何か物音がしたけど……」

　扉の前に立ち、ランディに声をかけているのは、ランディと同年代の女性である。薄い栗色のロングヘアーは腰のあたりまで伸びていて、軽くウェーブしている。ハッキリとした顔立ちで、少し生真面目な印象を与えている。背筋はピッと伸びており、クロスベル警備隊の制服がよく似合っていた。制服はボレロと軽くスリットの入ったタイトスカート、それに足を覆うタイツが黒色で、シャツとブーツがダークグレーと、暗色でまとめられているが、胸元のショートタイ、そして幅広のコルセット状のベルトがワインレッド色をしており、適度なアクセントとなっている。頭部にはダークグレーのベレー帽をかぶり、彼女のキリリとした印象をより強いものとしていた。

「悪ィ、ミレイユ。寝ぼけてベッドから落っこちちまった」

　ランディはいつものくだけた調子で言い、あくびをひとつした。ミレイユと呼ばれた女性はあきれ顔をしたが、ランディがTシャツに下着姿だと気づくと、急に頬を赤らめ、視線をそらした。

「ん？　どうしたよ」

「……ふ、服ぐらい着なさいよ！」

　そこではじめて、自分の姿がどうなっているのか認識したランディは、ニヤリと笑った。

「ミレイユ曹長殿のエッチ」

「な……！　バカなこと言わないの!!」

　廊下に響き渡るような大声を出され、ランディが顔をしかめた。

「まだ就寝時間だろうが……」

　しかしミレイユはそんなことはお構いなしに、顔を赤らめたままだ。それは怒りなのか、羞恥なのか、あるいは両方なのか。

「勝手にしなさい！」

　そう言いながら、肩を怒らせて立ち去ろうとしたミレイユだったが、振り返り言った。

「あとね、就寝時間はもう終わり。十分後には点呼よ、急いで」

「へーい」

　後ろ手でドアを閉めながら、気のない返事をするランディ。ひとつ大きく伸びをして、自分の手で頬をぴしゃり、と叩いた。

「そんじゃ、今日も勤労にいそしむとしますか」

ベルガード門は、クロスベル自治州とエレボニア帝国の国境沿いに立つクロスベル側の門である。門といっても、巨大な門扉が二国間を隔てているわけではない。二国間を隔てているのは、そびえ立つ断崖と、クロスベル側にある深い谷間である。クロスベル側から見ると、帝国側の高くそびえる断崖が進入を容易ならざるものとし、さらに深い谷間が阻んでいる。

　ベルガード門の正体は、地上二階、地下一階という石造りの建築物だ。その中にランディたち国境警備隊の事務局や居住区もある、いわば要塞のようなものだった。

　そして帝国側もベルガード門と似たような要塞を築き上げ、そのふたつの拠点を、巨大な鉄橋で繋いでいた。鉄橋は上下二層構造で、上部は徒歩や車両が通行でき、下部には鉄道のレールが引かれ、そのまま国境を越えて二国間を行き来できるようになっている。

　早朝のひんやりとした空気が、あたりを包む。

　門に向かって右手にある駐車場に、ランディたちクロスベル警備隊の人間が整列していた。みな、揃いのダークグレーのカーゴパンツに無地黒色のTシャツという動きやすい服装に着替えている。彼らの前には、直属の上官である二尉が立っていた。

　列の一番端にいたミレイユが、声を張り上げる。

「点呼！」

「一、二」とキビキビとした返事の中にひとつ、

「はーち」

と返したのはランディである。ミレイユは直立不動のまま、横目でランディをにらみつけるが、だらーっと立っている姿を見て、肩を落とした。

　点呼の後は、そのまま朝の訓練となる。体力作りのための持久走だ。現場を取り仕切るのはミレイユ曹長である。彼女は女性ながら、武術ではベルガード門詰めの男性隊員を押さえて一、二を争うほどの腕前なので、訓練の仕切りを任されるのは当然の流れだった。

　ミレイユのかけ声にあわせて規則正しく一定のペースで山道を走る。だが、ひとりペースを守りつつも、大あくびをしてダルそうに走っている人間がいる。言うまでもなく、ランディだ。

「一、二、一、二」と周りの人間が声をあげている中、ランディは小声でつぶやく。

「こんなことして、意味があるのかねぇ」

「オルランド軍曹！　声を出しなさい！」

　地獄耳だなぁ～、と中ば呆れつつ中ば感心し、ランディはわざとらしく声を張り上げた。

「おいっちにぃ！　おいっちにぃ！」

　持久走やダッシュなどの訓練が終わると、短めの朝食の時間となり、それが終わればすぐに仕事である門の警備へと就く。

　ランディたちのいるベルガード門は、隣接する大国であるエレボニア帝国との国境に作られている。

　有事の際には最重要拠点のひとつとなるが、今は平時である。門は山間にあることもあり、大変のどかな雰囲気で、今日も日が昇り、気候もよくうららか。小鳥のさえずりなども聞こえる。

　だが、一年少し前までは、国境近くで大規模な軍事演習が行われており、一触即発の事態だった。今の平和は、不戦条約が締結されたおかげである。

　そんな平和な光景の中、ランディが門前に立っている。格好は訓練時のラフなものではなく、警備隊の制服だ。その格好は女性隊員とほぼ同じで、上半身はダークグレーを基調とした配色のシャツ。肩からは黒色のボレロがかかっている。頭にかぶるダークグレーのベレー帽も同じだ。違いは、スカートではなくパンツであること、胸元のショートタイの色が黒であること、ワインレッドのベルトの幅が狭いこと、ぐらいである。

「のどかだねぇ……」

　ランディが、気の抜けた調子でつぶやく。少し離れたところで立っているカーターなどは、大きなあくびをしている。

　これで、ランチボックスがあれば、まさにピクニックである。できれば、ブランデーが入ったスキットルがあれば最高だな、などとランディは考えた。

「ま、ピクニックする場所としては、ちょいと無粋なものが目に入るがな」

　そうつぶやいて、ランディは振り返り、門の向こう側に目をやる。そこには、帝国が築き上げた厳ついガレリア要塞がそびえ立ち、帝国のシンボルである黄金の軍馬の紋章が嫌が上でも目に入る。

　ランディはしばらく鈍色（にびいろ）の要塞の壁を見つめていたが、ふいに目線を前に戻して、言った。

「腹減ったなぁ……」

　と、足音がして、そちらをのっそりと向くランディ。

「腹ペコなお前に朗報だ。交代の時間だとよ」

　しかし、ランディは喜ぶこともなく、ひとつ大きなため息をついた。

「交代してメシ食ったら、デスクワークか」

　ベルガード門に併設している建物には、事務所もある。ここでは、各自持ち回りでデスクワークを行う。業務日記の記

栽や資材補給の要請など、クロスベル警備隊にも書類仕事を必要とする場面は意外と多いのだ。

　事務所の中には机がいくつも並べられており、パッと見は中小企業の事務所と変わらない。数はそこそこ揃っているが、警備やら訓練やらで多くの隊員は出払っており、部屋の中にいる人間はまばらだ。

　そんな部屋の中に、ミレイユが入ってきた。気づいた隊員のひとりが声をかける。

「あ、お疲れ様です曹長。……どうしたんです？　そんな浮かない顔をして」

「ちょっとね……」

　ミレイユは気重な気分のまま、自分の席に腰掛けた。さっきまで上司である二尉に呼び出されていたのだが、そこで聞いてきた話に一点、気にかかることがあったのだ。思わず小声でつぶやく。

「今度はどんな無茶を言われるのやら……」

「はい？」

「ううん、なんでもないわ」

　嫌な気分を払うように首を振り、ふぅと息をつく。そこで、部屋のわずかな異変に気がついた。

「ねぇ、ランディは？」

　その声で、部屋の隅で作業をしていた男の隊員ふたりが、ビクッと肩を振るわせる。それを見て、ミレイユはイスから立ち上がり、彼らの元へと向かった。

「カーター、ラフィ、ちょっといいかしら？」

　向かい合わせの机に座っていたふたりの隊員は、書類から顔を上げずに答えた。

「な、なんだい？」

「異常はないよ、ミレイユ曹長。うん、異常なし」

　彼らは書類に向かい必死にペンを走らせている。

「それ、書類が逆さまよ」

「ひうっ!?」

　あまり聞いたことのない悲鳴を上げ、カーターが書類を落っことす。ミレイユはそれを見てため息をつき、ラフィに向かって言った。

「……で、ランディはどこにいるの？」

　ラフィは目を泳がせる。そんな彼の動きを読み切ったようにミレイユは次の句を告げた。

「いまなら、ふたりは見逃してあげるけど？」

　ラフィは心の中でランディに謝りつつ、すっと天井を指差した。

「また屋上？」

　ミレイユは呆れつつ天井を見上げ、まるで屋上にいるランディを見通すかのようにキッと睨んだ



その屋上では、うららかな日差しが照り、暖かい風が時折吹き抜ける。昼寝をするには絶好の陽気だった。
　ランディは屋上に寝そべっていた。ベレー帽を顔の上に乗せて日射しよけとしている。屋上はコンクリートに覆われているので寝心地は良くないはずだが、ここでの昼寝には慣れている様子である。早朝に飛び起きた分はおろか、今夜の分まで、睡眠時間を確保しようとしていた。

　ランディの夜は、たいがいクロスベル市街へと繰り出すところからはじまる。
　急速に成長を遂げるクロスベル市街。その中でも歓楽街はもっとも急成長を遂げた場所のひとつだ。街が夕暮れに染まる頃から、あちこちの店先でネオンが灯りはじめ、行き交う人々の数が一気に増える。日が落ちる頃には、街は色とりどりのネオンで彩られた極彩色の世界へと変わっている。
　そんな街角の一角、一本路地を入ったところにある酒場が、ランディたちの行きつけのお店である。かつては宿酒場だったが、今は改装し、二階部分まで座席として使っている。少し古めかしい内装は、今のクロスベルからすると時代遅れにも見えるが、懐かしい雰囲気を慕って来る常連客も多い。
　ランディがここを知ったのは、カジノハウス《バルカ》のドレイク・オーナーに連れてこられたからだ。ランディ曰く「あの狸オヤジ、口は悪いがチョイスする店のセンスはいい」ということで、常連として足繁く通っているのだ。
　グレーのタートルネックに、オレンジ色のパーカーという私服に着替えたランディは、同じく私服に着替えたカーターとラフィを伴って、店の一階の隅っこにあるテーブル席に座っていた。ここは、彼らのお気に入りの場所であり、よく陣取っているのだ。
「気持ちよく寝てたってのに、いきなりたたき起こして腕立て伏せ２００回だぜ？　信じられるかよ」
　そう言いながら、ビールがなみなみと注がれたジョッキをあおるランディ。半分近くを一気に飲み、どん、とジョッキを置く。少し赤くなった顔をカーターに近づけて恨めしそうに睨んだ。
「なのに、おまえらはおとがめ無しってか？」
「いやいやいや、俺らは関係ないですもん！」
「関係ない〜？　んじゃ、もうカワイイ女の子は紹介しなくていいってことか？」
「そ、それは……」
　カーターが困り顔でランディにすがる。カーターとラフィは、ランディが歓楽街で知り合った女の子を紹介してもらっていた。書類仕事を引き受けるのも、そういう事情があってのことだったのだ。ミレイユが知ったらただでは済まなさそうなので、ふたりとも昼間そのことは黙っていたのだ。
「ん〜、どうしよっかな〜」
　ランディはニヤニヤと笑いながらビールを飲む。困ったカーターは、あわててラフィに話を振った。
「な、お前からもなんか言ってくれよ」
　だが、当のラフィは既にでき上がりつつあった。
「ん〜？」
「いや、『ん〜？』じゃなくてよ」
「まあいいんじゃないかなぁ。曹長はランディにつっかかりたいだけだし」
　なんで？　という顔をしてラフィを見るランディ。しかしカーターはうんうんとうなずいていた。話の矛先が変わったのをこれ幸いと、ラフィの話に全面的に乗っかる。
「確かに、ミレイユ曹長はそういうところあるよなぁ」
「おいおいおい、お前まで何を言い出すんだよ」
　ランディはそう言いながら、イスにもたれかかりジョッキをおある。なみなみと注がれていたビールは、あっという間に残りひと口のところまで減っていた。
「で、ランディはどうなんだい？」
　酔っ払ったラフィが、とろんとした口調で尋ねる。何が、とはミレイユのことだろう。ランディはしばらくジョッキの中のビールを見つめていたが、一気に飲み干して言った。
「そうだな……俺に飲み比べで買ったら教えてやるよ！」
　また始まった、とカーターは思った。ランディは酔うと、何かにつけて飲み比べの勝負をしたがるのだ。
　しかし、ラフィの方はやる気マンマンだ。すでに大声で給仕のお姉さんを呼びつけていた。
「お姉さ〜ん、テキーラ、グラスで3つね」
「おいおい、ビールじゃなくていいのか？」
「なんだいランディ、今日はずいぶん弱気だね」
　ラフィの挑発に、ランディはニヤリと笑った。
「言ったな？　この俺にテキーラで勝負をかけようとしたこと、後悔させてやるぜ」
　言いながら、腕まくりをするランディ。頭を抱えるカーターと、テキーラのグラスをうれしそうに受け取るラフィを見ながら、ランディは思っていた。
　こいつらとなんも考えず飲むのが一番ラクだわ、と。
「それじゃ行くぞ、かんぱーい！」
　チン、と3つのグラスが鳴り、ランディはテキーラを一気に胃に流しこんだ。

　ベルガード門近くへと走る導力バス。その最終便に乗っていたランディは、ウトウトしているところを運転手の案内の声で起こされた。

あわててバスを降り、導力灯ひとつがぽつんとついているバス停に立つ。導力バスが走り去ると、あたりは静寂に包まれた。

ベルガード門の門前までいく導力バスの路線もあるのだが、かなり早い時間で最終便が出てしまう。ランディが飲んで帰る頃には、だいたいいつも終わっているので、こうして別の路線の導力バスに乗って、あとは歩きで帰るのが常だった。

ちなみにカーターは酔いつぶれたラフィを伴って、先にベルガード門へと帰っていた。ランディはひとりで飲み直して、この真夜中に帰ってきたのである。

そのまま無言で、ベルガード門へと向かって歩き出す。あたりは暗いが、夜目はきくし、なにより両側にこんもりとした森があるので、道を間違えることもない。

このあたりまで来ると、市街のネオンも遠く届かない。代わりに頭上には、満天の星空が広がっている。

その星空を見ながら、ランディは昔を思い出していた。《赤い星座》にいた頃の自分を。

あの頃は、こうやって星を眺めて綺麗だと思うこともなかった。ただ生きるために生き、生きるために殺していた。

命を共にした仲間もいた。何人かは仕事の最中に死んでいった。だがそれも、悲しいとは思わなかった。生きるとは、いつか死ぬことなのだから。

だが、あの日。ひとりの人間の死を見て、分からなくなってしまった。それまではなんの疑問も持たずに過ごしてきた、猟兵という生き方。戦って戦って、いつか殺される日々をおくること。それに、いったいなんの意味があるのかということを。

あれから何年になるだろう、と数えようとして、ふっと笑った。そんなことをしても、何の意味も無いことに気づいたからだ。

猟兵団を抜けだし、あちこち流れ歩いた。中には居心地良い場所もあったが、ここにずっととどまっていいものか、そもそもどこに行きたいのか、それが分からず、ずっとさまよっていた。

今いるクロスベル警備隊に来てからは、およそ一年になる。食べることにも、寝るところにも困らない。一緒に働いている連中も気の良い奴らばかりだ。居心地の良さなら、今までいたところでも一番と言ってもいいかもしれない。

だが、ここに骨を埋めるつもりはない。というか、そんなことは自分にはできないと知っているのだ。俺の居場所はここではないのだから。

俺の居場所？　そんなもの、この世に存在するのだろうか？

夜の冷えた空気を吸い込み、酒混じりの息をゆっくりと吐く。それだけで、身体が冷えていくのが分かった。

この真っ暗な道は、まるで自分の人生のようだ。ただ暗く、ただ進むしかない。そしてさまよい歩き、いつか歩けなくなり、道ばたでのたれ死ぬのだ。

と、視界の端に光が見えた。ランディは反射的に身構え、その光の正体を探る。直接光を見てしまっては夜目が利かなくなるので、その光の周りを観察する。

どうやら獣の類ではないようだ。だとすると人だろうか？

誰何するか考えているうちに、向こうから声がした。

「ランディじゃないの」

聞き慣れた声に、張り詰めていた緊張を一気に解く。

「なんだ、お前かよ」

導力ランタンを持って現れたのは、警ら中のミレイユ曹長だった。

「なんだとはなによ」

そういいながらミレイユはランディの傍らに近づき、鼻を鳴らした。

「やっぱり飲んでる」

「非番なんだから、そりゃ飲むだろうが」

「やっぱりこっちを見回り担当にしてもらって正解ね」

そういえば、とランディは気づいた。今日のミレイユは門前の警備担当だったはずだ。ということは、わざわざ自分のために配置を変わったらしい。まったく面倒見のよろしいことで、と軽口を叩こうとしたら、ミレイユが言った。

「どうせ酔っ払って、迷子にでもなってるんじゃないかと思ってたところ」

迷子、という単語に、ふっと笑みがこぼれた。今の気分を現すのに、これほど適切な単語もなかったからだ。

「確かに、俺はずっと迷子なのかもしれねぇな」

「え？」

ランディの言葉の意味が分からず、尋ね返すミレイユ。そのミレイユの肩を、ランディはポンと叩いて歩き出した。

「まぁでも、お前さんみたいなのが道を照らしてくれるんなら、悪くないかもな、案外」

ふとランディは思った。たまにこうして、自分のどうしようもなく真っ暗な人生を照らしてくれる灯りがあるのなら、せめてそこまでは歩いてみよう、と。

しかし、言われた方のミレイユは、ただ首を捻るばかりだった。

そんなミレイユにランディは声をかける。

「おーい、戻んなくていいのか？　置いてくぞ」

「あっ、ちょっと！」

そう言ってミレイユはランディに追いつき、並んで歩き始

めた。
　それから数日後。今にも雨が降りそうな曇天と肌寒さの中。ベルガード門の駐車場に、クロスベル警備隊の隊員たちが全員集合し、三列になり整列していた。
　彼らの前、小さな鉄製の台の上にいるのは、クロスベル警備隊の司令だ。年は四十歳代後半といったところで、小太りな身体を警備隊の制服で包んでいる。その制服には、司令の証である階級章があり、その横には色とりどりの勲章が多数つけられていた。その様子を見てランディは、自己顕示欲が勲章に形を変えただけだ、などと思った。
　司令といえば、隊内では現場にはほとんど顔を出さないことで知られている。普段はクロスベル自治州議会の議員たちとのコネクション作りに奔走していることは、公然の秘密だった。
　そんな司令が、なぜ今日に限ってここに来ているのか？
　それは、彼の斜め後ろで警備隊を見守る、数名のスーツ姿の男たちが原因のようだった。
　ランディの横に並んでいるカーターが小声で囁く。
「おい、あそこにいるの、帝国派の議員じゃないか？」
　その声に、ランディを挟んで反対側にいたラフィが答える。
「確かに、クロスベルタイムズで見たことあるな」
「それじゃ、この招集は……」
「おおかた司令が、議員様にいいとこ見せたいために視察でもしてもらおうって腹だろ」
　ふたりのやりとりを聞いていたランディが、興味なさそうにつぶやいた。
「朝礼なら、さっきやったばっかりじゃんかよ……」
　しかも、司令は無理矢理全員を招集した。本来ならば門を警備するべき人員まで、ここに並んでいる。これでは本末転倒だが、司令の命令とあれば誰も逆らえない。ミレイユが数日前、上官に呼び出されて憂鬱な顔をしていたのは、このことを聞かされていたからだ。
　上がアホだと、下っ端は苦労するねぇ……などと、ランディは他人事のように内心でつぶやいた。
「気をつけーっ！」
　二尉のかけ声にあわせて、勝手に身体が動く。条件反射というやつだ。わんこかよ、などと思うが、こういう時は脳みそを使わなくてよいので、逆にありがたい。
「捧げー、銃！」
　号令と共に、肩にかけていたアサルトライフルを手に持ち、右手で銃床を、左手で銃身を持ち、銃口を空に向けた状態で捧げる。隊員たちの一糸乱れぬ動きに司令は満足そうに目を細め、端から順に隊員たちを眺めた。

　こんな相手に恭順の意とやらは捧げたくないねぇ、とランディは内心で悪態をついていた。すると、隊員たちを順に眺めていた司令の視線が、自分のところでピタリと止まり、その表情がどんどん険しくなっていく。
　心の声が聞こえでもしたのだろうか？　だとしたら、我らが司令殿は読心術を身につけていることになる。魔法（アーツ）かなにかだろうか？
　ランディがそんなことを考えていると、司令が台の上から降りて、ランディの方へ向かってズカズカと歩いてきた。ランディは三列目だったので、一列目と二列目の人間を鷹揚な手つきでどかせる。そして、ランディの目の前にやってくると、不機嫌そうな表情で言った。
「貴様、名前は」
「はっ、クロスベル警備隊、ベルガード方面部隊所属、ランディ・オルランド軍曹であります！」
「オルランド軍曹、ひとつ尋ねたいことがあるのだが」
　司令はランディの手元をにらみつつ言った。
「君が手にしているそれは、何かね？」
「はっ、スタンハルバードであります！」
　ランディが手にしていたのは、他の隊員の持つアサルトライフルではなく、スタンハルバードだった。通常の斧と違い、刃の近くに導力ユニットが取りつけられていて、導力を打撃力に変換することでより大きな威力を与えるようにできている。だが、いま司令が問題にしているのは、打撃力ではなかった。
「軍曹、君以外は全員ライフルのようだが？」
「はっ、そのようであります」
　ランディの返答に、隣にいたラフィが思わずプッと笑ってしまう。が、司令にギロリと睨まれ、縮こまってしまった。
「何故君はライフルでないのかね⁉」
　その言葉に、ランディは一瞬だけ険しい表情を浮かべた。まるで、何かの痛みに耐えるように。しかし、すぐにいつもの表情に戻ると、しれっとした調子で言った。
「はっ、自分の好みではありませんので」
「なっ……！」
　狼狽するに、今度はあちこちから忍び笑いが起こる。しかし、司令の怒声がそれをかき消してしまった。
「どど、どういうことだ！　あれは帝国の最新モデルだぞ！
　私の尽力で導入が決まったようなものなんだぞ！」
　ランディがライフルを持っていないことに関する怒りは、そのあたりも関係していた。このライフル、彼が懇意にしている自治州議会のハルトマン議員が「警備隊にも最新の装備を」ということで帝国・ラインフォルト社製のアサルトライフルの購入を強く勧め、結果として導入されたものである。

視察に来ている帝国派の議員の手前、全員がライフルを持っていないとメンツに関わるのだ。
　ちなみに、司令は最新式だと言っていたが、実際にはだいぶ古い設計のものを、多少手を加えて型番だけ新しくしたものである。少し考えてみれば、国境を接する国に自国の最新式の武器を売るはずがないのだが、そのあたりのからくりを彼はまったく聞かされていないようだった。
「はぁ……すんません。でもなんか性に合わないもんで」
「しょ……⁉」
　またも絶句する司令に、またも忍び笑いが起こる。しかしミレイユなどは、この成り行きをハラハラとした様子で見守っていた。そんなミレイユの心配などまったく知らず、ランディは続ける。
「銃って、なんかコソコソしてる感じがするっつーか。あ、でも大丈夫っす！　自分、撃たれる前に敵の懐に飛び込んで、バッタバッタとなぎ倒しますんで」
　そう言って、得意そうにスタンハルバードを掲げる。大の大人が両手で支えるのも大変なこの武器を易々と扱うあたり、ランディの実力が垣間見えるのだが、残念ながら司令はその実力を見抜く能力を持っていなかった。
「そういうわけなんで、ライフルの代わりにこれじゃ……ダメっすかね？」
　申し訳なさそうに言うランディ。本人は謝っているつもりなのだが、結果として司令の神経を逆撫でするだけだった。
「くだらない言い訳など聞きたくはないっ！　オルランド軍曹！　至急自分のライフルを持ってこい！　これは命令だッ！」
　司令はこめかみに青筋を立て、泡を吹かんばかりに口から唾を飛ばして怒鳴る。そのあまりの形相に普通の人間なら引いてしまうところだが、ランディは顔色ひとつ変えずに答えた。
「あー……すんません、ライフル、なくしちゃって」
　ランディのその言葉を聞いた瞬間、司令の顔が熟れたトマトのように真っ赤になった。ふとランディは、トマトジュースで作られたカクテルであるブラッディマリーが飲みたいな、などと考えた。
「貴様は、クビだああああーーーっ！」
　の金切り声が響き渡り、他の隊員たちがギョッとした表情で司令とランディを見ている。だが、ランディの心の中はとても平静だった。
　仕方ないか。ま、いつかこんな日が来るだろうと思ってたし。
　ふう、と何かに区切りを付けるようにため息をひとつつく。
「じゃあま、そういうことで」

　そのままゆったりとした足取りで、ランディは自室へと歩き出した。
　あたりはざわざわとざわめくが、司令の手前、誰も動き出せない。そんな中をランディは悠然と歩いた。
「ランディ！」
　背中に声がかけられる。確かめるまでもない。聞き慣れたミレイユの声だ。おそらく引き留めて、なんとか謝らせようというのだろう。だが、そんな気分にはなれなかった。
　反発心とか、そういうのではない。ただ一度でも『ここにいるべきじゃない』と感じてしまった以上、静かに身を退くのが、お互いのためだと知っているからだ。
　だからランディは、ミレイユに感謝の気持ちを込めて、前を向き歩いたまま、ただ手をひらひらと振った。

　ランディの処分には、結局四日ほどを必要とした。
　クビと言われたものの、結果的には出願除隊という形に治まった。懲罰除隊を出すことはクロスベル警備隊の名前を傷つけることになる、というメンツを重視した結果だった。
　だが、これはランディにとっても朗報だった。懲罰除隊と違い、出願除隊ならば除隊金が出る。当座の生活には困らないのは正直ありがたかった。
　いつも街に繰り出す時の私服に着替えたランディは、部屋を見渡した。自分のベッドの上は綺麗に片づけられ、大きなショルダーバッグがひとつ置かれている。あちこち流れ歩く者としては、荷物はこれぐらいに抑えておくのがよいのだ。
　部屋の中で大きくのびをし、息をつく。そのままバッグを肩にかけ、部屋を出て行こうと扉を開けた。
　すると廊下に、制服姿のミレイユ曹長が立っていた。
「ずっとここで待ってたのか？　入って来りゃよかったのに」
　しかしミレイユはそれに答えず、じっとランディの顔を見た。その真剣さに、一歩身を退いてしまう。
「おいおい、そんな怖い顔すんなって。あ、もしかして俺をなぐさめに来てくれた？　『ランディ、私、あなたと離れたくない！』とかなんとか言っちゃって！」
　ランディが茶化しても、ミレイユは何も言わない。ランディは少し困った顔をして、言った。
「……今まで、世話になったな」
　その言葉に、ミレイユの顔がキッと厳しくなる。まるで、何かをこらえているかのような表情だった。ランディはそのことには触れず、そのまま立ち去ろうとする。
「ランディ、今すぐ司令室に行きなさい」
　意外な言葉に、足を止めるランディ。司令室だって？　書類の手続きはすべて済ませたはずだが。そんなことを考えていると、ミレイユが促した。

「返事は？」

「了解！」

ランディは敬礼をし、そのまま手をひらひらと振って、司令室に向かって歩き出した。

ミレイユはその背中を見つめていた。ランディの姿が通路の角を曲がり、見えなくなるまでずっと。

ランディが向かった先である司令室は、ベルガード門に併設されている建物の二階部分にある。一応司令が来た時に使うための部屋となっているが、めったに司令が来ないので、ほとんど使われることがない。ランディも一度入ったかどうか、というぐらいには印象が薄い。

しかし、いったい誰が自分を呼んでいるのだろうか？　直属の上司である一尉への挨拶はすでに済ませている。まさか司令が、と思ったが、自分でクビにした相手をわざわざ呼ぶだろうか？　と考えて、あの司令が自分のためだけにベルガード門くんだりまで顔を出すはずがない、と思い至った。

だとすると本当に誰が呼んでるのか思い当たらないな……などと考えていると、司令室の前に着いてしまった。

「ま、会えばわかるさ」

そうつぶやいて、司令室のドアをノックする。

ドア越しに聞こえた「どうぞ」という言葉は、女性のものだった。はて、いかな美女がお出迎えしてくれるのだろうか……などと悠長なことを考えながら、ドアを開けて部屋の中に入る。

司令室の中は赤い絨毯が敷き詰められ、豪奢な雰囲気だ。置かれている家具も、隊員にあてがわれている簡素なものと違って、いかにも高そうである。入って右手には、調度品として高価そうな絵画や壺や大皿が並べられている。この部屋の持ち主である司令の趣味なのだろうが、色合いも年代も制作者もバラバラで、ただお金に任せて集めたのがひと目で分かる。持ち主のセンスの無さをそのまま表しているような、醜悪なコレクションだった。

部屋の正面の壁には、クロスベル警備隊の紋章が大きく入った旗が部屋に飾られていた。その前に、大きめなデスクが置いてあり、それに見合うチェアがしつらえてある。ランディを呼び出した人物は、そのデスクの傍らに立ち、書類に目を通していた。

その姿を見て、ランディは驚いてしまった。彼女は、ここではなくタングラム門で執務を取っているはずだからだ。

クロスベル警備隊の制服を着ているが、一般隊員のものとはいくつかデザインが異なっている。一番特徴的なのは、ワインレッドの幅広のベルトをしていないこと。そしてブラウスの裾部分が、大きく斜めにカットされていることだ。これ

は、警備隊の中でも佐官以上の女性隊員にしか与えられない特別な制服である。

やや暗めのライトブルー色の髪をショートボブでまとめていて、襟足はやや肩にかかっている。薄く化粧をした顔立ちは理知的で、アンダーリムのメガネがその印象をより強調していた。その端正な顔を向け、彼女は言った。

「ご苦労様、オルランド軍曹」

「はっ！」

自然と身体が反応し、敬礼をしていた。先程ミレイユにしたのとは明らかに違う、緊張感を伴ったものだ。

この女性は、ソーニャ・ベルツ二佐。クロスベル警備隊副指令である。立場的には彼女と並ぶ地位の人間はいるが、その能力を認められ、実質的な警備隊のナンバー2と言われている。指揮官としてのカリスマなら、ナンバー1だという呼び声も高い。普段はタングラム門に詰めつつ、各地の警備隊に指示をする才女である。

ランディはタングラム門部隊との合同演習の際に、彼女と会っている。といっても、指揮官と一隊員としてだが。演習でランディたちベルガード門部隊は、彼女が指揮するタングラム門の精鋭部隊に完敗した。結果、ベルガード門部隊はソーニャ直々に特訓を受けることとなった。その特訓であったある出来事で「怒らせるとこれほど恐い女（ひと）はいない」とランディは思い知ることとなり、先のような態度につながったのである。

しかし、とランディは考える。彼女はタングラム門詰めで忙しいはずだ。なぜベルガード門に来ているのだろうか？

ランディの敬礼に、自身も敬礼で返答するソーニャ。だが、ふと表情を緩めた。

「考えてみれば……あなたはもう、隊員ではないのよね」

「あ」

言われるまでそのことに気づかなかった。その自分のマヌケさに、思わず苦笑するランディ。

「ごめんなさい、ついクセで」

そういってわずかに微笑む。その自然な表情に、思わず見とれてしまう。名指揮官の意外な一面を見て、緊張していた気分が一気に緩む。

「いや、敬礼したのは自分なんで、気にしないでください」

頭をかきながら、気まずそうに言うランディ。口調はだいぶくだけていたが、ソーニャは気にする様子もなく、そう、とだけ答えた。

「立ち話もなんだから、そこに掛けなさい」

「そんじゃ、お言葉に甘えて」

ソーニャの言うまま、室内にあるソファーセットに腰掛けた。自分の部屋にあった固いイスと違って、なんてふわふわ

してやがるんだ、などとつまらないことがランディの頭をよぎる。
「こんなに広い部屋を用意する必要があるとは思えないのだけど」
ソファーに座り、部屋を見回しながら、ソーニャが言葉を漏らす。つられてランディも、ぐるりと部屋を見渡す。
「自分たち下っ端にはとんと縁が無かったんで、なんとも……あぁ、掃除当番のやつは、ムダに部屋が広くてめんどくさいって愚痴ってたっけ」
ランディの言葉に、まあ、と少し驚くソーニャ。
「私の部屋を掃除してくれる隊員も、そんな風に愚痴っているのかしら」
「いや、それはどうかわからないっすけど……」
ちなみに、タングラム門にあるソーニャの副司令室は常に整理整頓されている上、掃除までソーニャがしてしまうらしく、『いったいどこを掃除すればいいのか』という逆の悩みを隊員たちが抱えているらしい。
ランディはまだ部屋を見回していたが、あることに思い至って、ソーニャに向かって愛想笑いを浮かべた。
「でも、こういう部屋には、年代物の酒瓶が置かれているのがお約束かなって」
「残念。隊内での飲酒は基本禁止よ。それは司令でも同じ」
「ハハ、やっぱそうっすよね」
優しい口調ではあるが、ぴしゃりと否定されてしまっては二の句が継げない。このままソーニャ副指令と他愛もない話をするのもよいが、相手も暇人ではないだろう。ランディから話を切り出すことにした。
「で、俺になんの用っすか？ 不敬罪くらった下っ端なんぞと話しても得なことがあるとは思えないんすけど」
ランディの言葉に、ふと口元が緩むソーニャ。
「不敬罪、とは面白い言い回しね」
「ま、正確には違いますけど、似たようなもんじゃないっすか」
「私の立場としては、肯定しかねるのだけど」
などと言っているが、暗に司令の横暴ぶりを肯定しているようなものだ。物静かな語り口だが、なんとも食えないな、などとランディは内心で苦笑した。
「実は、あなたにひとつ提案があって来てもらったの」
さあ来たぞ、とランディは身構えた。どんな無茶を言われるか、次の言葉を待つ。
「単刀直入に聞くわ。警察に興味はある？」
「……は？」
思わず間抜けな返事しかできなかった。
「ケーサツっつーと、犯人追っかけたりする、あの」
「ええ、そうよ」

ランディと警察の縁といえば、酔っ払いのケンカに巻き込まれた時に仲裁してもらったとか、その程度である。あとは、酒場でクロスベル警察の悪口を聞いたぐらいか。あちこちの街を渡り歩いてきたランディだったが、警察機構がこれほど『役立たず』と烙印を押されている街は珍しいな、と感じていた。
「私の知人が、クロスベル警察で警部をしていてね。彼が今度新部署を立ち上げることになったの」
「はぁ。でも俺、捜査官なんて無理っすよ？ 第一、資格もないし」
「その点は問題ないわ。新部署は警察のイメージアップのために作られる特別な課だから」
「イメージアップ？」
警察のイメージアップのための部署に、自分が行く。ますます訳が分からない話だ。どこの馬の骨ともしれない自分が『警察の代表やってます！』という顔をして、街中でビラでも配るというのだろうか？
ランディの疑問は顔に出ていたらしい。ソーニャは薄く微笑んだ。
「別にあなたに、人気取りのために愛想笑いを振りまいて欲しいわけではないわ。……もっとも、あなたなら案外いけそうだけど」
「はは……できなくはないっすけど、どうせなら相手は女性限定にしたいかなぁ～」
「でしょうね」
そう言ってうなずくソーニャ。
「とにかく、新設されるその課には、さまざまなジャンルのスペシャリストを揃えたいらしいのよ。それで、戦闘のスペシャリストとしてあなたを推薦しようと思い立ったわけ」
「俺を？」
「合同演習の時に見せてもらったけど、あなたの戦闘技術は警備隊隊員の中でも飛び抜けているわ。さすがダグラス教官から教えてもらっただけはあるわね」
ダグラス教官とは、《鬼のダグラス》として知られている、警備隊きっての実力派だ。警備隊きってのホープとして期待されていたが、司令に疎まれて新兵訓練などの閑職に回されていた。
「買いかぶり過ぎですって。ダグラスの兄さんに比べたら、俺なんて」
「謙遜ね。……あなたが本当の本気を出せば、ダグラス教官も圧倒できると踏んでいるのだけど」
そう言ってソーニャは、何かを見透かすような瞳でじっと見つめた。ランディはどきりとして視線をそらす。
「ハハ……それこそ買いかぶり過ぎですって」

「私、人を見る目はあると思っているのだけど」
「男を見る目は、別じゃないっすか？」
　いつもの調子で軽口を叩く。こうでもしないと、いつもの自分のペースを保てない。まったく、ソーニャには調子を狂わされっぱなしだと、ランディは内心でひとりごちた。
「しかし、戦闘のスペシャリストねぇ……」
　確かに自分は、戦闘のスペシャリストと言ってもいいだろう。警察でも格闘術ぐらいは教えるが、それは犯人逮捕のための制圧力でしかない。相手が武装した凶悪犯だと、自分のように突撃し、突破し、相手を打破するための圧倒的な力が必要になる。
　といっても、殺しの技術まではいらないと思うが。
「どうかしら？　いい話だと思うのだけど。ランディ・オルランド」
　フルネームで呼ばれて、我に返った。ソーニャは変わらずソファーに座り、こちらを見つめている。
「できたばかりの部署でしがらみもない。上司は……まぁ、ちょっと変わっているけど優秀な男で、窮屈に感じることはないでしょう。おまけに、警備隊と同じく寮も完備よ」
　確かによい話ではある。次の仕事先が用意されている上に、その仕事は警察だ。宮仕えは信用がある。保証がない身分では、今のクロスベル市では住居を借りることすらままならないだろう。しかも、その住居まで用意されているとなれば、飛びつかない手はない。
　だが、うまい話があってそのまま乗っかるほど、自分は青二才でもお調子者でもないつもりだった。
「ひとつ質問があるんすけど」
　どうぞ、というソーニャの言葉を待って、ランディは続ける。
「どうして俺にこの話を？」
「簡単なことよ。タイミングよくあなたが辞める時に、警部から声がかけられただけ」
「……本当に？」
　ランディの眼光が鋭くなり、目がスッと細くなる。だが、そんなランディの変化にも動じず、ソーニャは続けた。
「あなたとその警部、両方まとめて恩が売れるチャンスなの。これを逃す手はないでしょう？　それと、先程も言った通り、人を見る目はあると思っているから」
　そう言って口元に笑みを浮かべた。ランディはしばらくソーニャの顔を見つめていたが、急にフッと笑った。
　これだけべっぴんの女神様なら、騙されてみてもいいかもしれない。それに、そもそも行くあてもなければ、生きる目的もない。ただ流されるだけなら、面白そうなほうに行くさ。
　そうランディは思った。

「ま、他にアテもないし、お世話になるとしますか」
「そう、よかったわ」
　ソーニャは立ち上がり、デスクに置いてあった書類をランディに差し出す。
「これが推薦状。クロスベル警察の受付に行ってこれを見せれば、後は向こうで手続きを進めてくれます」
「へーい」
　ランディは推薦状を受け取り、書類を眺めた。
「特務……支援課」
「そう、それが、あなたが配属されることになる、新しい課よ」
「特務支援課」
　もう一度口にしてみる。なかなか悪くない響きだ。特務って響きは、純粋にカッコイイ。支援課ってあたりは微妙だが。
「それじゃ、さっそくクロスベル警察にでも行ってみますかね」
　ランディは勢いをつけて立ち上がり、推薦状を折りたたんでポケットにしまった。
「あなたの新しい生活が実り多きものとなるよう女神（エイドス）に祈っておくわ。それから、今までクロスベル警備隊に尽くしてくれた事、感謝します」
「ま、メシと寝るところを提供してくれる分ぐらいはがんばったつもりっすけど。それから、紹介マジで助かったたっす」
　ども、といってひょいと頭を下げるランディ。
「そんじゃ」
　そう言って、軽いノリのままドアを開け、出て行った。
　ソーニャは閉じられたドアを見つめて、ふっと笑みをこぼした。
「そのお礼の言葉は、あなたの同僚に言うべきじゃないかしら」
　いなくなったランディに向かってそうつぶやく。
　ソーニャがセルゲイに声をかけられ、特務支援課向きのメンバーを探していたのは事実だが、ランディのことを知ったのはミレイユのおかげであった。ランディがクビと言われてからの数日間、彼女は各方面の副指令クラスの人間に、処分の取り消しを求める嘆願書を送っていたのだ。そのうちの一通がソーニャの元に届き、彼女がこうして救いの手を差し伸べる結果となった。
　それに、ソーニャにとってもランディを警察内部に送り込むことは都合がよかった。セルゲイと共に、現場レベルで警察と警備隊のコネクションを作っておくことは、あれこれとプラスになることが大きいと感じていたからだ。彼女の考えは、程なくして起きるクロスベル自治州各地での魔獣による事件で早速証明されるのだが、それはまた別の話である。
　ソーニャは心の中で、セルゲイの作ろうとしている特務支

援課が、その目的を果たせることを祈りつつ、仕事へと戻っていった。

ランディは外に出て、ベルガード門の正面に立った。門の向こうに見える、見慣れた帝国の要塞とも今日でお別れだ。ランディは要塞に描かれた帝国の紋章を見ていたが、踵を返して、クロスベル市街へ向けて歩き出した。

外は天気もよく、うららかな日射しが降り注いでいる。ピクニックには絶好の陽気だ。ミレイユが出迎えてくれたあの夜、真っ暗だった道は、今は明るくてどこまでも見通せる。

ま、たまにはこんな日がないとな、などとひとりごちながら、ランディは足取りも軽く山道を歩いた。

これから先、数奇な運命を共にする仲間たちの元へと向かって。

ランディの章　了

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

THE LEGEND OF HEROES 碧の軌跡 アオノキセキ 情報課通信

碧の軌跡の情報をいち早くお届け!!

最新キャラクター画像と待望のゲーム画面を大公開!

9月29日に発売される最新作『英雄伝説 碧の軌跡』に登場する魅力的なキャラクターたちの最新イラストが登場。迫力の戦闘シーンや繊細な背景など、あわせて公開されたゲーム画面でも新たな冒険が楽しみとなってくる。また、特典としてエリィとティオのねんどろいどぷちが同梱される完全予約限定版は5月末に予約が締め切られるので、ゲットしたい人は最後のチャンスを逃さないようにしよう。



▲ティオ・プラトー（声：水橋かおり）
▲カンパネルラ（声：伊藤かな恵）
▲ダドリー（声：中井和哉）



▲灼熱の龍人を召喚し、辺り一面を熱線で焼き尽くす火の新アーツ「ロードインフェルノ」



▲ワジの新クラフト「セブンショット」



▲ティオのSクラフト「エーテルバスター」発動時のカットインがリニューアル！



▶前作で圧倒的な強さを見せたアリオスが遂にプレイヤーキャラに！



▲2人の仲間が連携して放つ強力なコンビクラフトに新技が追加！　今作ではノエル、ワジも使用可能に！



▲今作から登場する新型の戦術オーブメント「エニグマⅡ」。中央にマスタースロットという専用スロットがあり、ここにマスタークオーツと呼ばれる特殊なクオーツをセットすることで、マスターアーツが発動可能になったり、基本能力がアップするなど様々なメリットが得られるようになる。

■製品情報

●英雄伝説 碧の軌跡
発売日：2011年9月29日発売予定　ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PSP（プレイステーション・ポータブル）専用
UMD枚数：1枚
メモリ：未定
プレイヤー人数：1人
価格：通常版：6,090円（税込）　ドラマCD同梱版：7,980円（税込）
完全予約限定版：9,240円（税込）
CEROレーティング：未定

英雄伝説 空の軌跡 ソラノキセキ THE ANIMATION 遊撃士協会アニメ支部



●キャスト
エステル：神田朱未
ヨシュア：斎賀みつき
シェラザード：塩山由佳
オリビエ：子安武人
ティータ：今野宏美
クローゼ：皆口裕子
ほか

アニメ『空の軌跡』のイメージイラストが到着!

今回は新たにアニメ「空の軌跡」のキービジュアルをお届け。画面いっぱいに動き回るエステルたちに期待が高まる。アニメのキャストはそれぞれゲームと同じオリジナルキャストに決定したので、既にゲームをプレイした人は冒険の思い出が甦ること間違いなしだ。また、アニメが待ち遠しい人のためにイベント上映が決定。これらの情報が掲載された公式サイト（http://www.sora-anime.com/）や、公式Twitterもスタートしたのでチェックしながら続報が入るのを楽しみに待とう。

●原画：野崎あつこ　●仕上：加藤里恵　●撮影処理：横山 翼　●背景：丁 樹録(Bamboo)



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.04

発行人　吉田隆

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
田中一寿

デザイン・DTP　さとうだいち

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（ビーニーズ）

発行　株式会社フィールドワイ
〒 101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/

制作・販売協力　シナノ印刷株式会社